

千葉市動物公園リスタート構想 アドバンストプラン



令和7年12月



目次

1	はじめに	1
2	「千葉市動物公園リスタート構想」について	2
3	リスタート構想の取組状況	3
4	リスタート構想策定以降の本園の状況	1 1
	(1) 入園者数	1 1
	(2) 収支	1 1
	(3) 来園者の評価（アンケート結果）	1 2
5	現在の動物園を取り巻く状況	1 3
	(1) 生物多様性に関する動向	1 3
	(2) 持続可能な開発目標（SDGs）	1 3
	(3) アニマルウェルフェア	1 4
	(4) 動物園の法的位置付け	1 4
6	リスタート構想の推進にあたって今後重視する新たな視点	1 5
7	今後の整備と新たな取組	1 6
	(1) 湿原ゾーン整備	1 9
	(2) 森林ゾーン整備	2 3
	(3) 大池ゾーン整備	2 7
	(4) 国内希少種の保全事業	2 9
	(5) 登録博物館としての取組	3 1
	(6) 年間入園者数100万人達成と安定した経営へのロードマップ	3 3
	参考資料	3 5

コラム一覧

環境エンリッチメントとは？	4
アカデミア・アニマリウムとは？	8
千葉市動物公園の景観特性「プライベートスカイ」	1 8
動物科学館のリニューアル	3 2

I はじめに

本園では、平成26（2014）年3月の「千葉市動物公園リスタート構想」（以下、「リスタート構想」といいます。）策定以降、同構想に基づき、来園者満足度を向上させ、賑わいを取り戻すための様々な施策や取組を実施してきました。

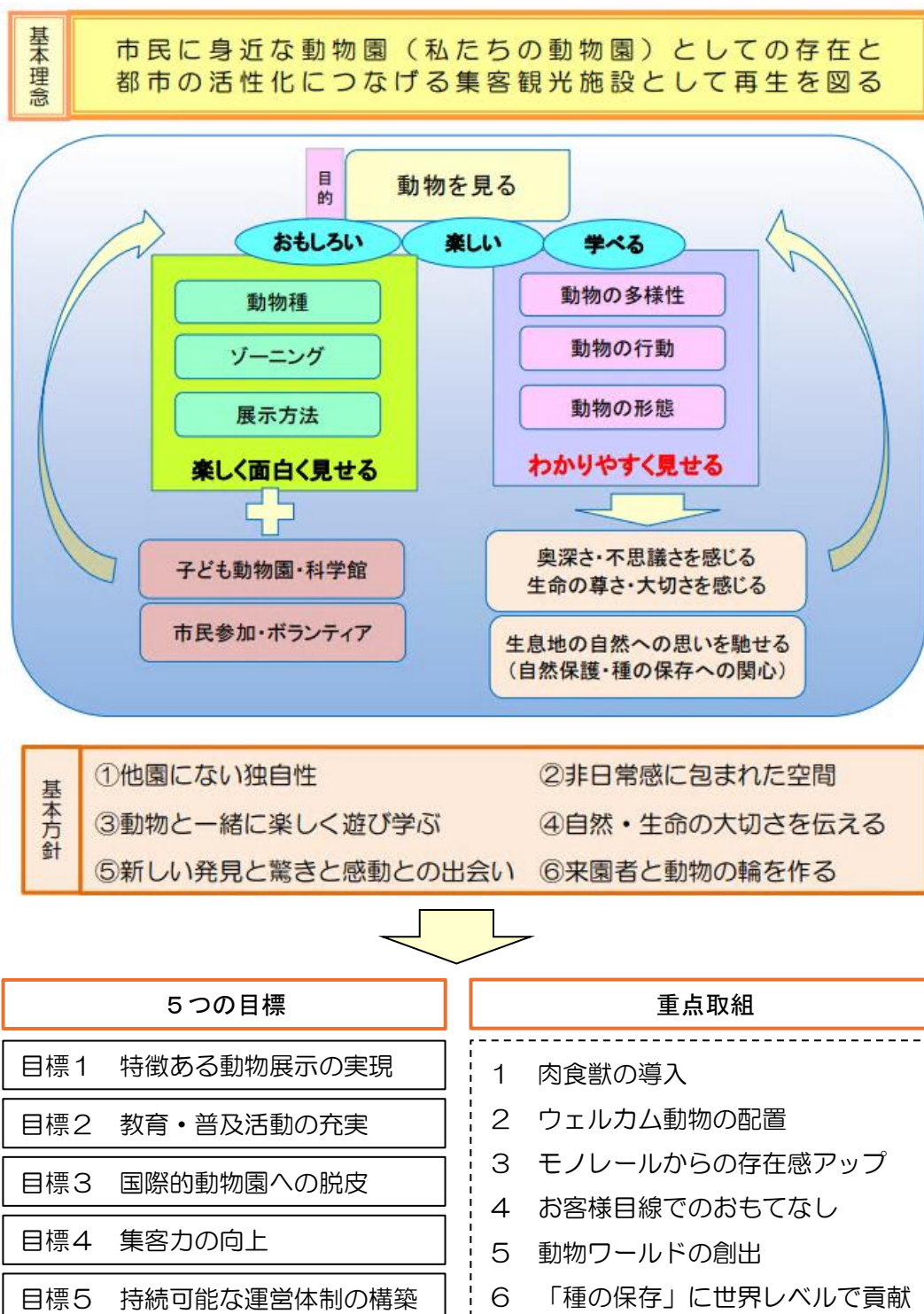
一方で、リスタート構想の策定から10年以上が経過し、社会情勢や動物園を取り巻く状況は策定当時から変化しています。これらの変化に対応するため、現在の状況を踏まえた新たな視点を加えて今後の取組を進め、リスタート構想の具現化を目指していく必要があります。

千葉市動物公園リスタート構想アドバンスプランとは、リスタート構想における再整備計画を具体化するとともに、新たに取り組むべき事業について取りまとめた推進計画で、開園50周年に向けて再生していく本園の姿を示したものです。

2 「千葉市動物公園リスタート構想」について

「千葉市動物公園リスタート構想」は、来園者満足度の向上を図り、再び賑わいを取り戻すことで、市民に感動を提供し続ける素晴らしい施設として継続運営していくことを目的に、平成26（2014）年3月に策定されました。開園50周年に向けた長期構想であり、年間入園者数100万人の達成を最終目標としています。基本理念と基本方針のもと5つの目標を掲げ、象徴的な取組として早期に実現させる重点取組を設定しています。

【リスタート構想概念図】



3 リスタート構想の取組状況

リスタート構想に基づきこれまでに実施した主な取組は以下のとおりです。
※リスタート構想の目標ごとに主な取組を記載しています。複数の目標に関連する場合、「関連目標」に該当する番号を記載しています。（巻末「参考資料」参照）

目標Ⅰ関連（施設整備、動物展示）

1-3（2）平原ゾーン整備

関連目標：3-1（5）

草原ゾーンと家畜の原種ゾーンを「平原ゾーン」に再整備し、ゾーンテーマに沿った動物を再配置・導入しました。

- ・ライオン展示（平成28年度）
- ・ミーアキャット展示（平成30年度）
- ・チーター・ハイエナ展示（令和2年度）
- ・シマウマ・ヤマアラシ展示（令和3年度）



1-3（3）子どもゾーン整備

関連目標：5-2（2）

遊園地エリアを、乗馬や小動物との触れ合い体験ができる「子どもゾーン」に再整備し、平成28年4月にオープンしました。整備後は「ふれあい動物の里」*という名称で民間事業者が管理・運営しており、各種イベントやバーベキューなども実施しています。

* 令和7年4月から「わくわくあにまるフィールド」に名称変更



1-4（3）種別飼育展示繁殖計画に基づく個体導入

関連目標：3-1（5）

平成29年度に策定した種別飼育展示繁殖計画*に基づき、レッサーパンダ、フクロテナガザル、クモザル、チーター、ブチハイエナ、マレーバク、アミメキリンなどを導入し、繁殖に努めています。

* ゾーンテーマとの整合性や種の保存への貢献度などの観点から、継続的に飼育管理し、繁殖させる種を選定した計画



1-4（5）環境エンリッチメントの取組

関連目標：3-2（1）

動物の豊かな暮らしにつながる飼育環境の構築のため、様々な環境エンリッチメントの取組を行っています。

- ・ライオン、ハイエナへの屠体給餌
- ・ミーアキャットの人工アリ塚
- ・サル類やアカハナグマの給餌器
- ・チーターラン など



アカハナグマの給餌器

環境エンリッチメントとは？

環境エンリッチメントとは、動物の生息環境や行動に基づき、動物の環境や管理方法を改善・向上させるための工夫のことで、アニマルウェルフェア向上のための手法の1つです。飼育下の動物が必要としていながら不足している刺激や環境要因を飼育環境へ追加し、動物の本来の行動を引き出したり、動物の選択肢を増やしたりするために行います。環境エンリッチメントには以下の5つのカテゴリーに分類されます。

採食エンリッチメント

動物本来の栄養バランスや採食行動を発現できるようにするための工夫



ライオンの屠体給餌

社会エンリッチメント

群れを作れる、他の動物と接触できるなど動物種に合った社会環境にするための工夫

認知エンリッチメント

動物の好奇心や探求心を刺激する装置や遊具など、動物自身が思考できるための工夫



新たに植えた植物の匂いを嗅ぐニシゴリラ

空間エンリッチメント

木に登る、泳ぐ、休むなど、動物の行動特性に合った空間を作るための工夫



展示場の木に登るレッサーパンダ

感覚エンリッチメント

飼育環境を固定せず「音」や「匂い」など動物の五感に刺激を与える工夫



「エンリッチメント大賞2024 正田賞」受賞！



茨城大学・日立市かみね動物園・本園の3機関が連携して研究・教育活動を推進するプロジェクト「ZOO SCIENCE HUB」が「エンリッチメント大賞2024 正田賞」（主催：NPO法人市民ZOOネットワーク）を受賞しました。

ZOO SCIENCE HUBでは、「かかりつけの研究機関」としての役割を担う茨城大学が動物園をバックアップし、互いの学びの機能を向上させる共同研究活動を展開しています。3者が主体的に参画し、それぞれの得意分野を活かして組織的・継続的に連携しながら、エンリッチメントやアニマルウェルフェアに関する研究を多数行っています。このような連携関係が継続し、広がっていけば、動物園のエンリッチメントがより良いものになっていくと期待できる点が高く評価されました。

2-1（1）ICTを活用した教育・普及プログラムの実施

関連目標：4-1（2）

ICTを基盤とした先端技術の強みを活かし、多様な教育・普及プログラムを実施しています。

- 動画の遠隔中継システム（スマートグラス等）を使用した小学校への遠隔授業の実施（令和元年度～）
- 小学校への出張授業のオンライン化（令和元年度～）
- 病院を対象としたオンラインガイドの実施（令和5年度～）



オンライン出張授業の様子

2-2（2）動物科学館学習展示施設改修

関連目標：—

「生命の森 熱帯雨林」をテーマとした学習展示施設にリニューアルし、令和7年3月に再オープンしました。多くの絶滅危惧種が生息し、私たちの生活にも深く関わっている熱帯雨林の歴史や現状、保全の取組を知り、地球環境問題を考えるきっかけとなる内容になっています。



2-3（2）動物に関連した文化・芸術・科学の体験の場

関連目標：4-3（4）

動物や自然に関連した文化・芸術・科学の体験の場の提供を推進しています。

- 「動物園で浪曲」（令和元、4年度）
文化庁芸術祭新人賞を受賞した浪曲師がシートン動物記を口演
- 「動物園で考古学」（令和2年度～）
加曽利貝塚博物館、埋蔵文化財調査センターとの連携事業



2-3（4）アカデミア・アニマリウム（教育分野）

関連目標：3-2

令和2年度から、当園の調査・研究、教育活動を「アカデミア・アニマリウム」*と称し、推進しています。

* 詳細は8ページ

- 動物の生態から考えるSDGsワークショップ（令和3年度～）
- 大学オープンセミナー（令和4年度～）
- 生物多様性フォーラム（令和5年度～）



3-1 (3) 世界動物園水族館協会（WAZA）への加盟

関連目標： -

本園は、アニマルウェルフェアや倫理規定に関する審査のうえ、平成27年にWAZAへ直接加盟しました。直接加盟によって動物園としての信頼を高めるとともに、世界中の動物園と飼育動物の情報を瞬時に共有できる体制を取っています。国際的な協力のもと動物の移動を行い、希少動物の持続可能な繁殖や種の保存につなげています。



3-1 (4) チーター繁殖

関連目標：1-4 (3)

本園は日本動物園水族館協会（JAZA）のチーター繁殖計画に参加しており、同計画に参加する14園（当時）を代表し、令和2年に海外の動物園からチーターを導入しました。令和3年、本園初となる繁殖に成功し、6頭の子どもが生まれました。これは、遺伝的多様性の維持の点から非常に有意義な繁殖といえます。6頭の子どもは、繁殖計画に基づき、それぞれ国内の他動物園に移動しました。



3-2 (1) 寄付・協賛、助成金の活用による研究財源確保

関連目標：5-1 (2)

園内で行う研究を推進するため、新たな寄付・協賛制度やJAZA等の助成金を活用し、種の保存、アニマルウェルフェア、環境エンリッチメント等の研究に必要な物品・資材や財源を確保しています。

- Amazonほしい物リスト（令和元年度～）
- クラウドファンディング（令和3年度～）
- JAZA 野生動物保護募金助成



クラファン・助成金で実施したハイエナの屠体給餌

3-2 (1) 博物館法に基づく「登録博物館」登録

関連目標：2-3 (4)

令和6年11月、博物館法に基づく「登録博物館」に登録されました。国内動物園施設としては3例目の登録となります。博物館としての機能を充実させるとともに、社会教育的な学術・研究等の機能の認知度向上を目指します。



3-2 (3) 教育機関や民間企業との共同研究等の実施

関連目標： —

教育機関との共同研究や、産官学連携による実証実験を実施しています。

- 「Gorillas in The Mist Project」
高等専門学校との共同研究で、環境エンリッチメントの取組として、夏季のゴリラ放飼場の気温上昇抑制を目的に、気象計測IoTによるミスト噴霧実験を行いました。
- 「AIを活用した動物生態の見える化プロジェクト」
産官学連携で、クロザルの画像データをもとに個体や行動を識別するAI学習モデルを開発し、得られた生態データの活用によりアニマルウェルフェアの向上を目指しています。



3-2 アカデミア・アニマリウム（調査・研究分野）

関連目標： 2-3 (4)

令和2年度から、当園の調査・研究、教育活動を「アカデミア・アニマリウム」*と称し、推進しています。

* 詳細は8ページ

- 園職員主体の研究の推進「一人一研究」
- 教育機関、研究機関、企業等との共同研究
- Zoo Science Hub（茨城大学・日立市かみね動物園との研究教育連携プロジェクト）



アカデミア・アニマリウムとは？

令和2年度から、当園の研究・教育活動を「アカデミア・アニマリウム」と称し、推進しています。この名称は「動物をめぐる学術の場」を意味し、紀元前4世紀古代ギリシアの哲学者アリストテレスの著書「動物誌（De historia animalium）」から着想しています。アリストテレスが、自身が見聞した動物に関する知識を客観的に書き記してこの動物誌をまとめ上げたように、私たちもアリストテレスの主体的な志を受け継いで学術に臨んでいきたいという思いを込めています。



アカデミア・アニマリウムの目的

「学術（Academic）」をキーワードとし、「科学的情報の収集・発信」及び「学びの場」となることを目的としています。

アカデミア・アニマリウムの活動

当園主体の活動だけでなく、様々な機関（学校、研究・学術団体、企業等）と連携した全ての研究・教育活動が含まれます。また、茨城大学（ZOO SCIENCE HUB）、岐阜大学（動物園生物学研究センター）、東邦大学と協定を結び、研究・教育分野の連携強化も行っています。

研究活動



園主体の研究



外部機関との共同研究



企業等との連携による
実証実験

教育活動



講演会



教育プログラム



展示



各種実習

研究活動（連携含む）

平成30年度 13件→令和5年度 63件

教育活動（連携含む）

平成30年度 47件→令和5年度 92件

4-1（2）ICTの活用による情報発信強化

関連目標：－

- ・ X（旧ツイッター）の発信強化により、フォロワー数が約10万人（平成30年度）から16万人（令和6年度）に増加
- ・ 令和元年度に公式YouTube開設、チャンネル登録者数約8400人（令和6年度）
- ・ 令和2年度に公式アプリ導入、ダウンロード数約36300件（令和6年度）



YouTube動画の一例

4-2（2）飲食・物販の充実

関連目標：5-2（2）

来園者のニーズの高い、レストランや売店の魅力アップに取り組んでいます。

- ・ 動物園ならではのレストランメニューの提供
- ・ カフェスタンド等飲食施設の新設（サバンナカフェ、はぴはぴのパン屋さん、ワイルドキッチンカフェ）
- ・ 売店のリニューアル



4-3（2）趣向を凝らした新たなイベントの実施

関連目標：－

大人をターゲットにしたイベントや、オンライン開催、開園時間外のイベントなど趣向を凝らしたイベントを実施し、新たな集客につなげています。

- ・ 「BREW at the ZOO」（平成30年度～）
クラフトビールと音楽を楽しむ大人のためのイベント
- ・ 「自動運転ロボットRakuro乗車体験イベント」（令和2年度～）
自動運転ロボットによる園内周遊体験
- ・ 「PARKCAMP IN ZOO」（令和3、4年度）
動物園でのキャンプ体験。動物達の息吹を感じながら過ごす一夜と早朝の動物観察
- ・ 「千葉市動物公園×太田ゆか Live Safari from South Africa」（令和4年）
南アフリカの日本人サファリガイドが案内するライブ中継のバーチャルサファリ体験
- ・ 「トワイライトZOO」（令和6年度～）
開園時間を延長し、夕方から夜の動物園を楽しむイベント



4-3（5）様々な企業や団体との連携

関連目標：5-3（2）

- ・ 千葉都市モノレール株式会社と連携し、セット券の販売や車体ラッピング広告等を行っています。
- ・ 令和4年度に「年間パスポート提携パートナーシップ」制度をスタートし、多種多様な施設との提携による特典サービスの拡充と、市内の回遊促進を図っています。
- ・ 令和5年度に公益財団法人イオン環境財団と連携協定を締結し、生物多様性に関する調査、植樹、環境教育活動等に協働で取り組んでいます。



目標5 関連（経営）

5-1（2）寄付制度の活用

関連目標：1-4（5）

参加しやすく、かつ、目的や用途がわかりやすい寄付制度を新たに導入し、活用しています。

- ・Amazonほしい物リスト（令和元年度～）
- ・クラウドファンディング
 - ・屠体給餌プロジェクト（令和3年度）
 - ・風太20th記念プロジェクト（令和5年度）
 - ・未来へ紡ぐゴリラプロジェクト（令和6年度）
- ・KIFUZOO（有料動画配信サービス）（令和3、4年度）



5-1（3）ネーミングライツの導入

関連目標：-

平成28年4月のライオン展示場オープンに合わせてネーミングライツを導入し、新たな広告料収入を確保しました。



5-4（2）環境負荷低減・脱炭素の推進

関連目標：1-2（2）

環境負荷低減のため、園内で発生した有機物の処理や、2050年カーボンニュートラルに向けた再生可能エネルギーの導入を進めています。

- ・動物の糞尿や残餌を分解処理する消滅型微生物処理機の実証実験（令和3年度～）
- ・管理事務所へ屋根置き型太陽光発電設備を設置（令和6年度）
- ・剪定枝等を粉碎した木質チップを燃料としたバイオマスボイラーの設置の検討



全目標を横断する取組

千葉市スマートシティプロジェクト

関連目標：-

本市のスマートシティプロジェクトの中で、本園の「スマート動物園の実現」はリーディングプロジェクトに位置付けられています。動物園の機能の高度化と、来園者満足度の向上のため、最先端技術やデータを活用した取組を実施しています。

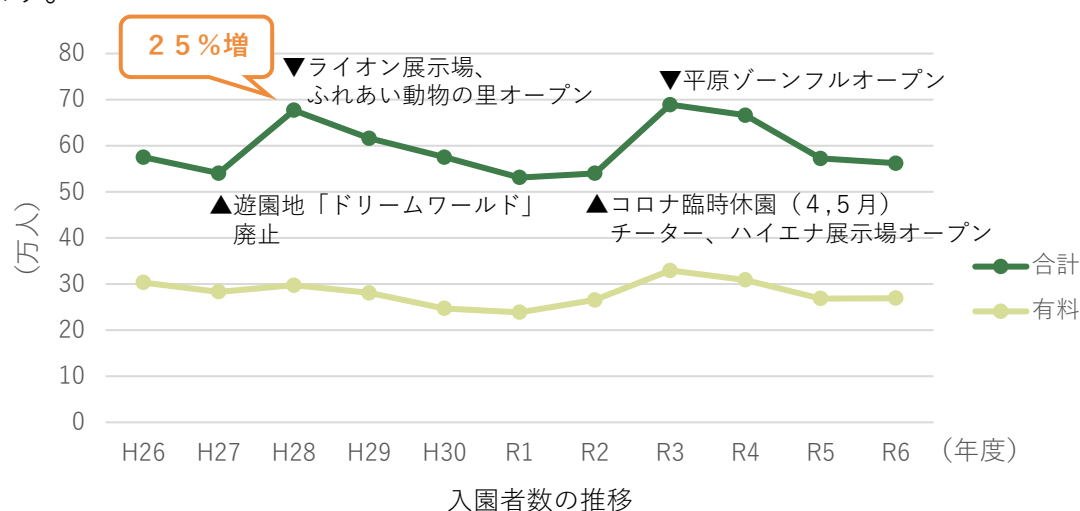
- ・自動運転技術の活用による新たな移動・ガイドサービスの提供
- ・井戸水を利用した屋外空調システムによる環境改善・省エネ
- ・AIを活用した来園者動向の把握と来園シミュレーションによる経営効率化



4 リスタート構想策定以降の本園の状況

(1) 入園者数

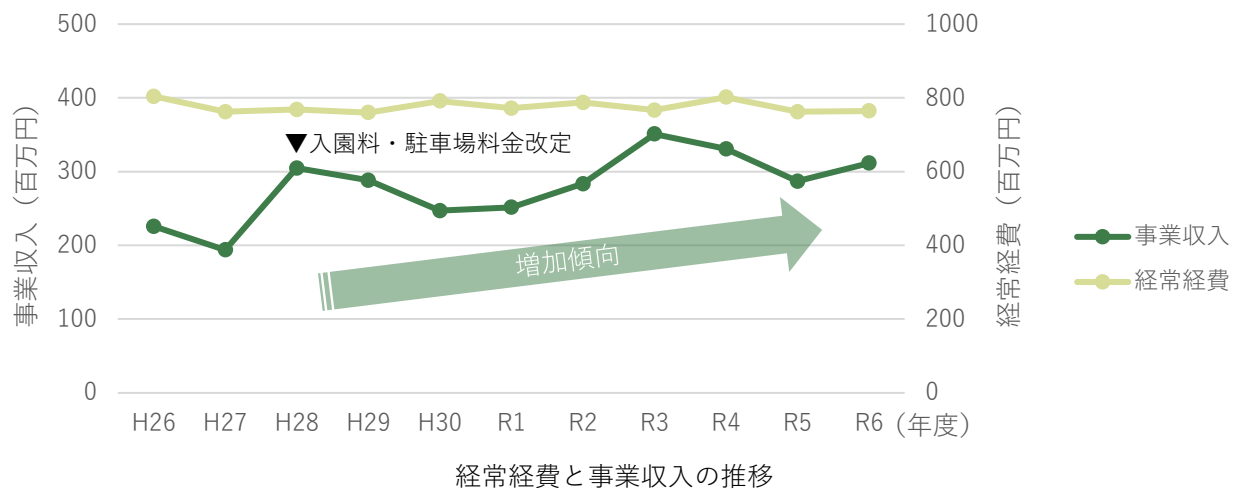
ふれあい動物の里とライオン展示場がオープンした平成28年度には、入園者数が約68万人（前年度比約25%増）となりました。令和2年度にはチーターとブチハイエナの展示場がオープンしましたが、新型コロナウイルスの緊急事態宣言に伴い、最盛期である4～5月の約2か月間臨時休園したことから、入園者数が約54万人となりました（当該休園期間の過去平均入園者数は約16万人）。令和3年度には平原ゾーンがフルオープンし、入園者数は約69万人に増加しました。その後、令和4年度から再び減少に転じていますが、これは、リニューアルに向けた子ども動物園の閉鎖（令和5年3月）、動物科学館の休館（令和6年1月）の影響を受けていると考えられます。



(2) 収支

一般的に、海外では寄付が動物園に対する重要な支援手段と認識されており、寄付金が積極的に活用されています。寄付文化が確立していることや、多様な寄付プログラム、税制上のインセンティブ、企業による活発なスポンサーシップなどが背景にあります。一方、日本では寄付文化が定着していないこと、公的資金で運営される動物園への寄付の必要性が十分に認知されていないことなどから、寄付金収入は限定的であり、収支の差が開く一因となっています。

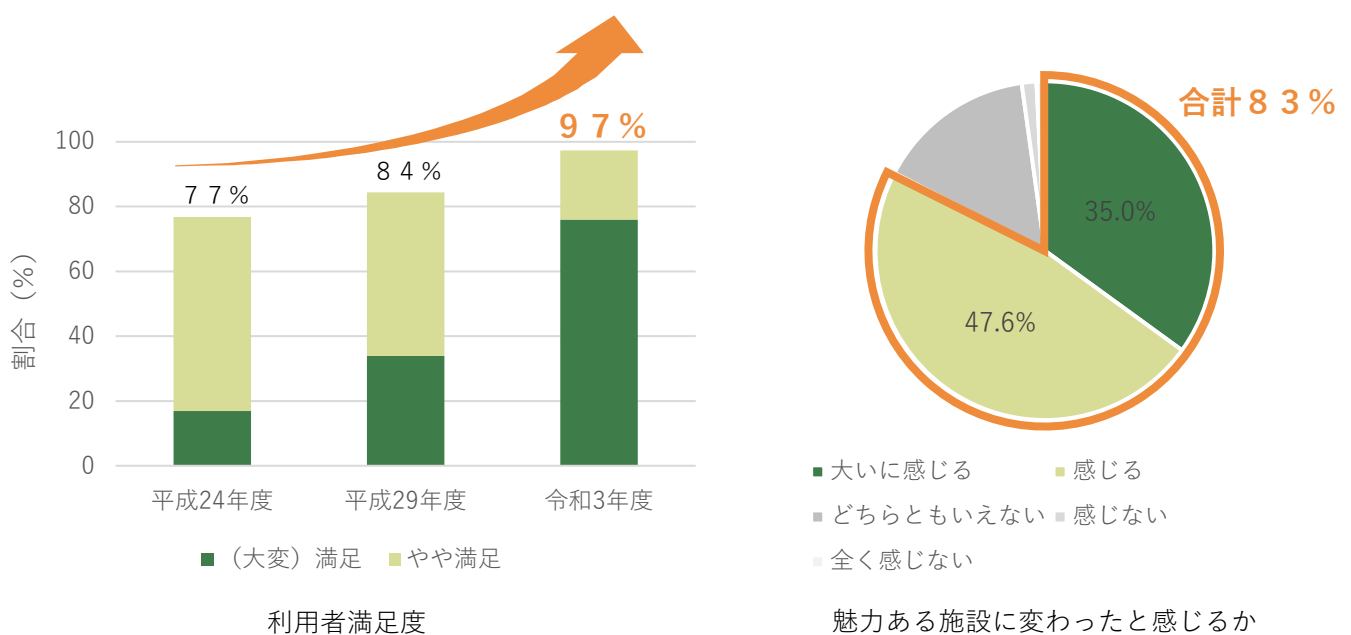
当園では、経常経費は7.6億円から8億円程度で推移しています。事業収入は、入園料と駐車場料金を改定した平成28年度に増加し、その後も増加傾向が認められます。これまで外部資金の活用等によって改善を図っており、今後も持続可能な経営に向けた取組を一層強化していきます。



(3) 来園者の評価（アンケート結果）

アンケートに「（大変）満足」と回答した人の割合は、リスタート構想策定前の平成24年度と比べると、平成29年度、令和3年度と年々増加しています。特に、令和3年度は「（大変）満足」「やや満足」と回答した人の合計が約97%に上り、来園者の満足度が大きく向上していることがわかります。

また、魅力ある施設に変わってきていると「大いに感じる」「感じる」と回答した人の合計は約83%となり、リスタート構想の取組を実施してきた成果が表れているといえます。



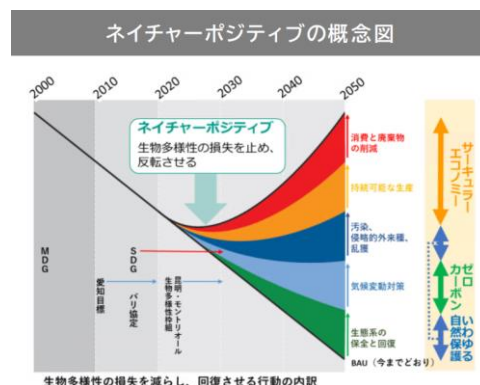
5 現在の動物園を取り巻く状況

(1) 生物多様性に関する動向

生物多様性と生態系サービスは、人間活動によって世界的な悪化が続いています。その直接的な要因は、陸・海の利用の変化や生物の直接採取などで、背景には人々の価値観や行動様式、社会、経済、制度などの間接的な要因があります。

令和4（2022）年の生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）において、新たな世界目標

「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択され、「ネイチャーポジティブ（自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め反転させること）」が2030年ミッションとして掲げられました。ネイチャーポジティブは、これまでの自然保護の取組に加えて、一人一人の価値観や行動を変え、社会・経済全体を変革していく考え方です。



出典：生物多様性国家戦略 2023-2030

また、令和2（2020）年に、世界動物園水族館協会（WAZA）と国際動物園水族館教育者協会（IZE）が共同で「保全のための社会変革：世界動物園水族館協会保全教育戦略」を公表しました。この戦略では、動物園や水族館が、生物多様性保全の取組の一環として質の高い保全教育を提供できるようにするための指針が示されています。

このように、生物多様性保全のための社会変革・行動変容が求められる中で、動物園が「種の保存」と「教育・環境教育」の役割を果たすことが一層必要とされています。

(2) 持続可能な開発目標（SDGs）

平成27（2015）年に開催された国連サミットにおいて「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、誰一人取り残さない（leave no one behind）、持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」が掲げられました。令和12（2030）年を達成年限とし、17のゴールと169のターゲットから構成されています。

これを受け、令和2（2020）年、世界動物園水族館協会（WAZA）が「私たちの地球を守る：世界動物園水族館協会持続可能性戦略2020－2030」を公表しました。動物園や水族館が真剣にSDGsに取り組むことは、これらの目標の世界レベルでの達成に大きく貢献する可能性を秘めており、この戦略では、それぞれの目標に対して動物園や水族館がどのように取り組むことができるかについてのガイドラインが示されています。

動物園における施策や取組の実施にあたっては、WAZAの戦略等を参考にしながら、SDGsの達成に貢献するよう努める必要があります。

また、SDGsの次の指標の一つとして注目されているウェルビーイング（Well-being）についても意識していく必要があります。

（３）アニマルウェルフェア

アニマルウェルフェアとは、動物の身体的及び精神的状態を意味します。簡単にいうと、良いアニマルウェルフェアとは、動物の心と体が健康かつ幸福であり、飼育環境とも調和している状態のことです。

近年、動物園においてもアニマルウェルフェアへの配慮は必須事項となっています。世界動物園水族館協会（WAZA）では「動物福祉戦略」を公表しており、日本動物園水族館協会（JAZA）でも「動物福祉規程」を定めています。動物園には、これらの戦略や規定に沿い、飼育管理する動物のアニマルウェルフェアの向上に取り組む責務があります。

また、アニマルウェルフェアに関する研究の推進や、来園者に対してアニマルウェルフェアや環境エンリッチメントについての教育的な取組を行うことも重要です。

（４）動物園の法的位置付け

日本に動物園が誕生して140年が経過しますが、我が国には動物園を直接規定する単独の法律は存在しません。一方で、施設の位置付けや実施事業には多くの法律が関係しています。博物館法では自然科学分野の博物館または博物館相当施設（指定施設）に該当し、都市公園法では都市公園内に設置する公園施設または特殊公園の一種として位置付けられます。また、動物園が実施する事業には、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）や、動物の愛護及び管理に関する法律（動物愛護法）が関わってきます。

このような中、種の保存法が平成29（2017）年に改正され、「動植物園等が生物の多様性の確保に重要な役割を有していることに鑑み、（中略）絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に寄与するよう努めなければならない」ことが動植物園等の責務として明文化されました。併せて、生息域外保全の重要性が増大している状況を背景に、希少種の保護増殖に取り組み、一定の基準を満たす動植物園等を環境大臣が認定する「認定希少種保全動植物園等」制度が創設されました。この認定を受けることで、他園館との希少種の移動手続きが円滑に行えるようになるなど、希少種保全の取組の一層の推進が期待できます。

また、令和4（2022）年に博物館法が改正され、博物館登録制度が見直されました。登録博物館の登録を受けることで、動物園の「社会教育施設」としての収集・保管、展示・教育、調査・研究といった機能の明確化と、社会的な認知度の向上が期待できます。本園は、令和6（2024）年に登録博物館に登録されました。引き続き、社会教育施設としての機能を意識し、各種取組を実施していきます。

6 リスタート構想の推進にあたって今後重視する新たな視点

動物園には「種の保存」、「教育・環境教育」、「調査研究」、「レクリエーション」の4つの役割がありますが、生物多様性保全に関する現在の世界的な潮流の中で、「種の保存」と「教育・環境教育」の役割がますます重要になっています。これらの役割を果たすとともに、SDGsに取り組み、地球規模の課題の解決に貢献することは、動物園の社会的責任です。

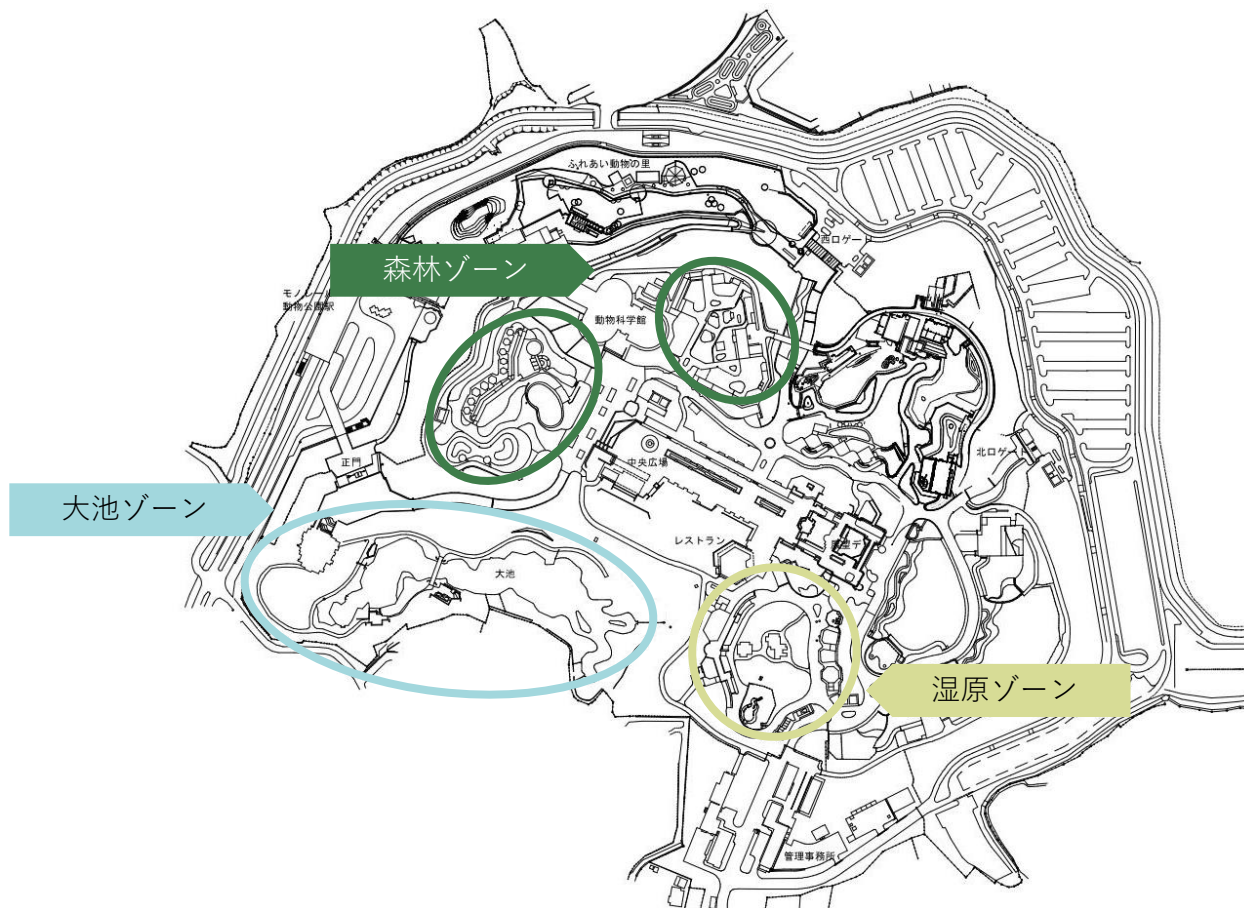
また、動物園には、飼育動物のアニマルウェルフェアの向上に取り組む責任があります。アニマルウェルフェアの向上は、動物の本来持つ能力を引き出し、いきいきとした行動の発現や、健全な繁殖にもつながります。また、来園者にとっても、動物の本来の姿を観察することで、感動や発見、関心が生まれ、動物に対する正しい理解が深まります。さらに、アニマルウェルフェアの向上のためには、調査・研究を行うことも欠かせません。これらのことから、アニマルウェルフェアは、動物園の4つの役割を支える重要な柱といえます。

今後は、現在の状況に対応した新たな視点として、生物多様性の保全、SDGsの達成への貢献、アニマルウェルフェアの向上といった視点を重視するとともに、動物園が果たすべき役割と責任についてより一層留意しながら、リスタート構想の具現化を推進していく必要があります。

7 今後の整備と新たな取組

ここでは、今後整備予定の「湿原ゾーン」、「森林ゾーン」、「大池ゾーン」について、前述の視点を踏まえた具体的な整備内容を記載します。

また、新たに取り組む「国内希少種の保全事業」及び「登録博物館としての取組」の内容を示します。



ゾーン位置図

ゾーン計画の基本方針

「生息環境」と「地域」でゾーンを再編し、テーマに合わせて動物を配置します。

整備方針

「動物の暮らしを魅せる」展示空間の創出

動物の生息環境を再現することで、来園者が単に動物の姿や形を観察する場ではなく、その動物がどのような環境で暮らし、どのような行動をしているのかを学ぶことができる空間を創出します。

また、本園の景観特性「プライベートスカイ」を活かし、人工物の映り込みのない広々とした空を借景にします。

なお、計画にあたっては、リスタート構想に記載された内容を、アニマルウェルフェア基準への対応、展示手法の実現性、ゾーンテーマとの整合性等の観点から検証し、必要に応じて見直しを行いました。

[効果]

- ・ アニマルウェルフェアが向上します。
- ・ 動物の本来の行動や習性が引き出され、健全な繁殖につながります。
- ・ 来園者が動物の本来の姿を観察することで、感動や発見、関心が生まれ、動物に対する正しい理解が深まります。
- ・ 来園者が動物の暮らす環境を知ること、生態系や生物多様性の保全への関心が高まり、行動の変容につながります。

設計指導



若生 謙二 氏

大阪芸術大学芸術学部教授／動物園デザイナー

全国の動物園で「生息環境展示」の実現に取り組み、天王寺動物園「アフリカサバンナ」、よこはまズーラシア「チンパンジーの森」ほか、多くの設計を手掛ける。2022年上野動物園「パンダのもり」の設計で日本造園学会作品賞受賞、ほか受賞多数。

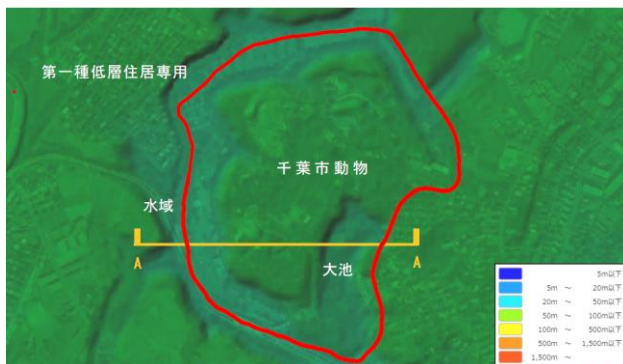
千葉県動物公園の景観特性「プライベートスカイ」

本園は、房総半島基部に広がる下総台地に位置しています。動物展示施設や動物科学館のある主要エリアは海拔約25mの洪積台地上にあり、駐車場やふれあい動物の里は旧葭川支川の河川敷だった海拔約13mの沖積低地部分にあります。

下総台地の辺縁部には舌状台地が多く発達しており、本園も舌状台地上にあります。舌状台地とは、台地が平地に臨む末端の部分で、舌のような形状で平地側に突き出した地形のことです。台地上にある本園の主要エリアは三方を沖積低地に囲まれ、円形舞台のようになっています。この地形によって対岸の台地から一定の離隔距離が確保され、さらに台地の外周の斜面林が園内からの視線から園外の建物や工作物を遮蔽することで、外部の人工物の景観への映り込みを排除し、空のみを借景とする「プライベートスカイ」を実現しています。本園の周囲一帯は第一種低層住居専用地域に指定されており、高層建築物が建設される可能性は極めて低いいため、今後も人工物の映り込みのない景観を維持していくことができると考えられます。

「プライベートスカイ」は本園特有の財産であり、今後もこの景観を守っていく必要があります。特に、台地外周の斜面林はこの景観の成立に不可欠な要素であり、将来に渡って保全・管理を行っていかなくてはなりません。

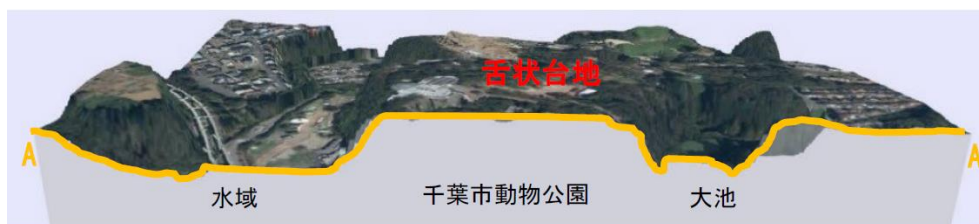
今後の整備に際しても、唯一無二の「プライベートスカイ」を活用していきます。



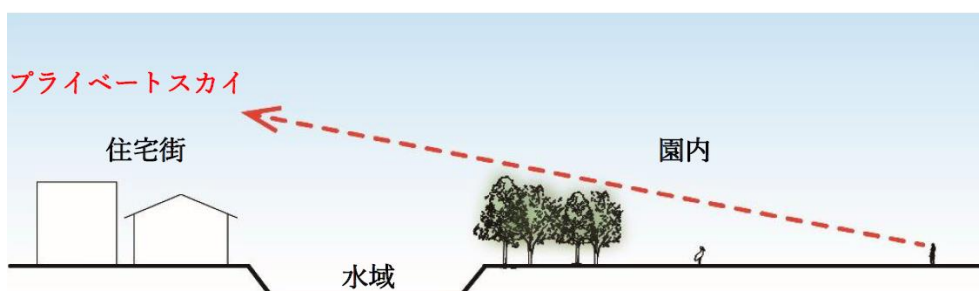
色別標高図（出典：国土地理院ウェブサイト）



駐車場から見た斜面林



高低断面図 ※高さ方向3倍表示（出典：国土地理院ウェブサイト）



プライベートスカイの概略図

(1) 湿原ゾーン整備



ハシビロコウ

アジア初の繁殖を目指した 環境づくり



- 飼育下のハシビロコウの繁殖事例は海外での3例のみで、国内では実績がありません。(令和7年12月時点)
- 本園は国内で唯一、産卵経験のある個体を飼育しています。
- 生息地の湿原の環境を再現することで、飛翔や営巣行動など本来の行動を引き出し、アジア初となる繁殖を目指します。

カピバラ

「露天風呂」のイメージを変える



- カピバラは露天風呂に浸かる姿が有名ですが、これは本来の生態ではありません。
- 本園では、カピバラの生息地の環境を再現し、本来の生態を観察できるようにすることで、正しい動物の知識を普及します。

アメリカビーバー

ビーバーダム風の施設から 観察できる！



- ビーバーが作るダムを模した施設を整備し、そこからビーバーの生態を観察できるようにすることで、ワクワク感を創出します。

施設整備に合わせ、再生可能エネルギーや省エネ技術の導入を検討し、脱炭素を推進します。



湿原は、多様な生態系に加え、水を保って干ばつや洪水を調整する機能、水を浄化する機能、炭素の貯蔵機能など、多面的な機能を有しています。これらの環境テーマについても伝えていきます。

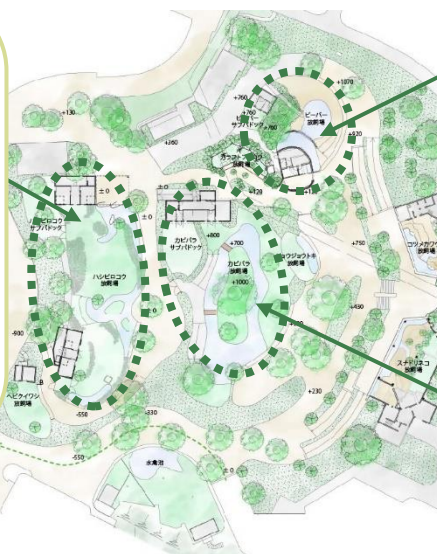


- リスタート構想記載のウォークスルー型フライングケージは、近年の鳥インフルエンザ発生頻度の増加により、観覧制限期間が長期化するリスクが高いため、計画を見直します。
- ペンギン及びアシカは、湿原ゾーンの他の展示種と生息環境が異なることから、計画を見直します。

エリア

ハシビロコウ

- 繁殖行動に繋がる飛翔行動を発現させるため、十分な広さの展示場を整備します。
- ハシビロコウが生息する湿原をイメージした修景を行い、採食行動、営巣行動などを引き出す環境をつくります。



アメリカビーバー

- 木を倒し、削り、巣に運ぶといった一連の行動が可能な環境を整備します。
- ビーバーが生息する北米の森林地帯の湿原をイメージした修景を行います。

カピバラ

- 群れで泳げる広々とした水場を整備します。
- 色鮮やかなショウジョウトキとの通景展示を行います。

スケジュール

	令和5年度 2023	令和6年度 2024	令和7年度 2025	令和8年度以降 2026～	前期	中期	後期
湿原ゾーン	基本計画	基本設計	実施設計	工事	●先行オープン ●全面オープン		



ハシビロコウ

「動かない鳥」として有名で、当園ではレッサーパンダの風太に次ぐ人気種です。

湿地に単独で暮らし、魚類や両生類などを食べます。獲物が水面に上がってくるのをじっと待ち、大きなくちばしで捕まえます。英名のShoebillは「木靴のような大きなくちばし」という意味です。

生息地：中央アフリカ、スーダン、ザンビア、ウガンダの一部

カピバラ

水辺の近くの草原や熱帯雨林で、オス、メスを含めた群れで暮らしています。足には水かきがあり、泳ぎが上手です。齧歯目の中で最も大きい種です。

生息地：南アメリカの湿地帯など



アメリカビーバー

池や湖、川に、ペアと子どもたちの家族で暮らします。一生伸び続ける門歯で木を切り倒し、ダムや巣を作ります。巣の入口を水中に作り、天敵の侵入を防ぎます。尾は水中で舵やオールになる平たい形をしています。

生息地：アラスカ、カナダ、アメリカ

コツメカワウソ

水辺に棲み、甲殻類、カエル、魚などを食べます。指には小さな爪と水かきがあり、泳ぎが得意です。家族を中心とした数頭のグループで行動し、多様な鳴き声で仲間とコミュニケーションを取ります。

生息地：インド、スリランカ、東南アジア、中国南東部



その他の展示動物（予定）

- ・スナドリネコ
- ・ヘビクイワシ

- ・カラフトフクロウ
- ・タンチョウ

- ・ショウジョウトキ
- ・水禽類



湿原ゾーン ハシビロコウ展示のメインビュー



湿原ゾーン カピバラ展示のメインビュー



湿原ゾーン ビーバー展示のメインビュー



湿原ゾーン 俯瞰図

(2) 森林ゾーン整備



アフリカの森

国内の新たな繁殖基地に！

本園初の繁殖を目指した環境づくり

- 国内で飼育されているゴリラは6園で20頭まで減少しています（令和7年12月時点）。本園はそのうち6頭を所有していますが、これまで繁殖実績はありません。
- ゴリラが群れで生活できる空間を整備し、繁殖を目指します。



森林は、炭素貯蔵や水・土壌の保全など、地球全体の環境維持に重要な役割を担っていることを伝えます。また、「アジアの森」では、郷土千葉の自然環境の変遷について伝えます。



リスタート構想に記載されているオランウータンの飼育及びサル比較舎は、アニマルウェルフェアの基準を満たした施設の整備が困難なことから、計画を見直します。

アジアの森

アジアの森林

希少種の「種の保存」への貢献

- マレーバクはJAZAの繁殖計画取組種ですが、本園では20年近く繁殖実績がありません。
- 生息地である熱帯雨林の環境を整備し、繁殖を目指します。



日本の森林

新時代のサル山を千葉発で提案

- 千葉県高宕山のサル生息地は国の天然記念物に指定されており、日本最初のサル山のモデルとされています。
- 高宕山をモデルに、動物に対する畏敬の念を育む「見上げる」展示をつくります。



施設整備に合わせ、再生可能エネルギーや省エネ技術の導入を検討し、脱炭素を推進します。



エリア

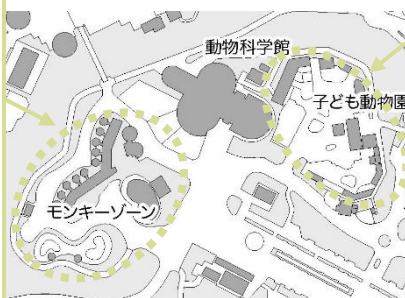
アジアの森

アジアの森林

- マレーバクが泳ぐことのできる水場を整備します。
- アジアの熱帯雨林をイメージした修景を行います。

千葉の森林

- ホンドザルを中心に、県内では絶滅したムササビ、外来種で生息域を拡大しているキョンなど、千葉特有の展示を行います。



アフリカの森

- 既存樹木を活用し、ゴリラの樹上での行動を引き出します。
- ゴリラが暮らすアフリカの森林をイメージした修景を行います。
- 背後の斜面林を借景に、奥行きのある森林の景観を創出します。

スケジュール

	令和5年度 2023	令和6年度 2024	令和7年度 2025	令和8年度以降 2026～	前期	中期	後期
森林ゾーン							
第1期 アフリカの森	基本計画			基本設計	実施設計	工事	●オープン
第2期 アジアの森					基本設計	実施設計	工事
第3期 科学館動物展示場						基本設計	実施設計
平原ゾーン 未整備部分						基本設計	実施設計
						工事	●オープン

ニシゴリラ

当園のロゴマークのモチーフとなっている動物です。開園にあたり、「ゴリラの飼育に力を入れたい」との思いからデザインされました。

「シルバーバック」と呼ばれるオスをリーダーとして、血縁関係のないメスとその子どもを含め5～10頭の群れを形成します。主に地上で生活しますが、木に登ったり、低木や葉を利用してベッドを作ることもあります。

生息地：アフリカ西部の熱帯雨林



マレーバク

森林や水辺のやぶ地に単独で生活し、主に夜間に活動します。水辺を好み、泳ぎが得意です。草や木の葉、果実を食べ、水の中でフンをする性質があります。

生息地：ミャンマー、タイ、マレーシア、スマトラ島の熱帯雨林、湿地



フクロテナガザル

1頭のオス、1頭のメス、その子どもからなる群れを作ります。大きなのど袋を膨らませて力強い鳴き声を発し、群れのテリトリーを守ったり、絆を強めたりします。腕の長さは足の長さの1.5倍もあります。

生息地：マレー半島、スマトラ島の森林



ホンドザル

複数のオスとメスを含む群れで暮らしています。体毛は茶褐色や灰褐色をしています。毛を清潔にするとともに、親密さを深めるため、互いに毛繕いし合います。繁殖期は顔とおしりが普段より赤色になります。

生息地：日本（北海道を除く）

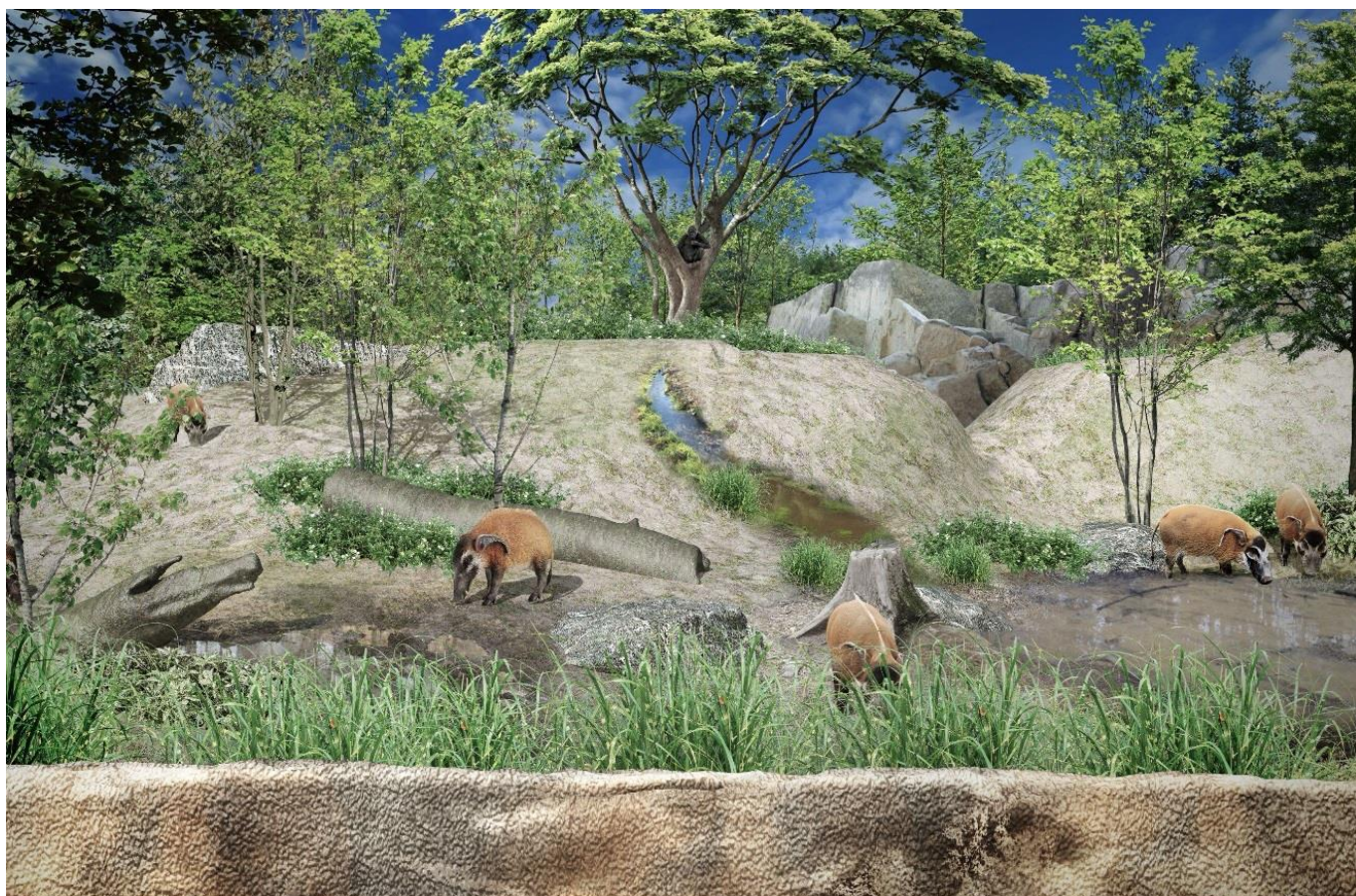


その他の展示動物（予定）

- | | | |
|---------------|-----------|----------|
| ・アカカワイノシシ | ・ブラッザグエノン | ・ホロホロチョウ |
| ・エリマキキツネザル | ・ビントロング | ・キジ類 |
| ・アカアシドゥクラングール | ・ムササビ | ・キョン |



アフリカの森 ゴリラ屋外展示のメインビュー



アフリカの森 アカカワイノシシとゴリラの通景展示



アジアの森林 マレーバクとテナガザルの通景展示



日本の森林 ホンドザル展示のメインビュー

(3) 大池ゾーン整備

方針

ゾーン計画の基本方針

- 大池ゾーン全体を大型のビオトープとして位置付け、生物多様性や生態系を観察・体験できるエリアとして活用します。



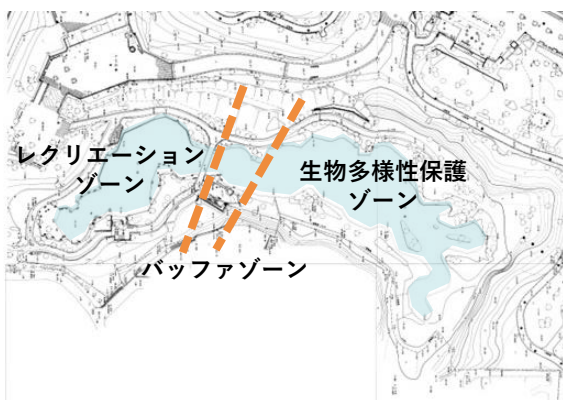
大池



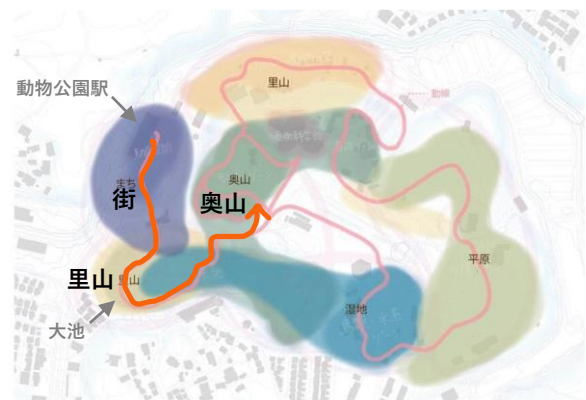
大池に架かる平橋

整備方針

- 開園から40年かけて形成された自然環境とそこに生息する生物を保全するとともに、地元千葉の自然や生き物について学ぶ環境教育の場として活用していくため、「生物多様性保護ゾーン」、「レクリエーションゾーン」、それら2つの緩衝地帯としての「バッファゾーン」に区分します。
- 大池ゾーンに里山の景観を創出し、モノレール動物公園駅前の空間（街）から大池（里山）、そして動物展示エリア（奥山など）へと、景観のつながりによって没入体験がシームレスに連続していく空間をつくります。



大池ゾーニング



動物公園全体ゾーニング

環境再生方針

- 大池に生息する希少な在来種を保全するため、生物多様性に悪影響を与えるアメリカザリガニ、コイ、園芸スイレンの駆除（除去）や、池内部に蓄積した有機物の除去を行い、環境を改善します。
- 保全活動を持続的に行っていくため、担い手となるボランティアを育成します。
- 将来的には、市内に生息し絶滅が危惧される在来種（魚類等）の保全場所としての活用を検討します。

現在の大池ゾーンで見られる生き物



モツゴ



スジエビ



クロダハゼ



カワセミ



オオタカ



コイ



アメリカザリガニ



タモロコ



コシアキトンボ



アズマヒキガエル



キシノウエトタテグモ



オシドリ



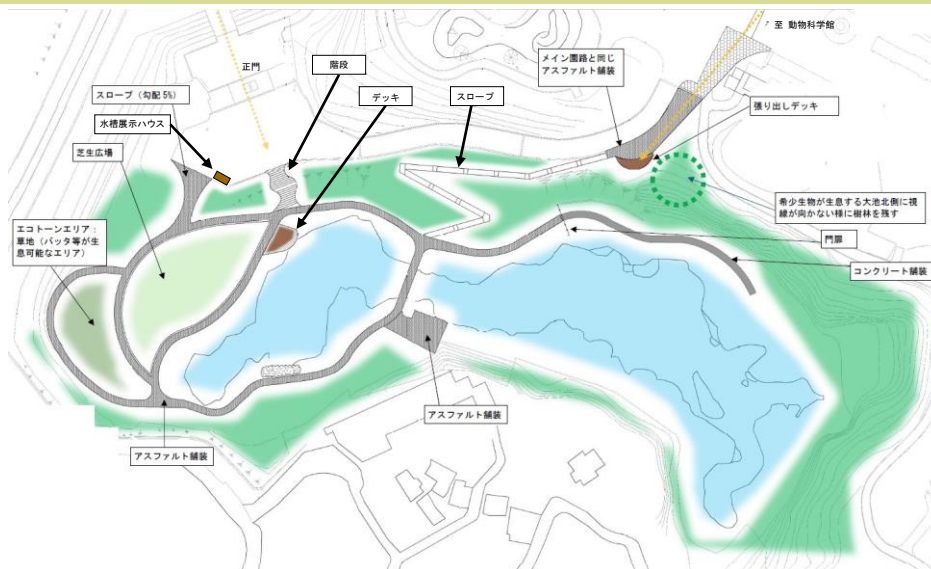
園芸スイレン

【駆除対象】

水生生物 (在来種) 6科7種
(外来種) 4科6種

野鳥 18科29種
昆虫 23科37種

計画平面図 (案)



スケジュール

	令和5年度 2023	令和6年度 2024	令和7年度 2025	令和8年度以降 2026～	前期	中期	後期
大池ゾーン							
整備		基本設計	実施設計	工事	●オープン		
生物調査・保全活動	生物調査・再整備計画	定点観測・保全活動・ボランティア育成					
景観計画		ランドスケープ計画					

計画策定責任者



ランドスケープ計画

霜田 亮祐 氏

千葉大学園芸学研究院
准教授



生物調査・再整備計画

木村 幸一郎 氏

持続可能な生態系を考える
環境共育研究会 (R G E E A)
代表理事

(4) 国内希少種の保全事業



国内希少種の保全事業の目的

当園では、これまで様々な動物の飼育下繁殖に取り組んできましたが、今後は、培ってきた技術と知見を国内希少種の保全にも活かし、自国の自然環境の保全に対して責任を果たす動物園を目指します。また、事業を通して、身近な生物や自然環境、それらの保全の大切さを伝える啓発にも取り組んでいきます。

国内希少種保全の取組の実績を積み重ねることで、種の保存法における「認定動物園」*認定を目指します。認定後は、同制度の様々な法的インセンティブを受けながら、一層取組を推進していきます。また、フィールドと連携した保全活動が進んでいる欧米の動物園からの、日本の動物園に対する評価向上の一助となることが期待できます。

* 認定希少種保全動物園等。詳細は 14 ページ

トゲネズミ類生息域外保全事業について

JAZAと環境省は、平成26年に「生物多様性保全の推進に関する基本協定」を締結し、絶滅危惧種の保全や普及啓発などに連携して取り組んでいます。この取組の一つとして、日本固有のトゲネズミ類の生息域外保全*事業を行っており、まずは「アマミトゲネズミ」を対象に、JAZA加盟施設で飼育・繁殖の技術開発を進めています。

本園は令和6年度に同事業への参画が決定し、令和7年3月からアマミトゲネズミの飼育を開始しました。

* 絶滅のおそれのある生物を、本来の生息地の外に保護し、繁殖させることで絶滅を回避する方法。



トゲネズミ類の生息域

アマミトゲネズミについて



長さ2cmほどのトゲのような黒色の体毛が特徴で、これが名前の由来になっています。

アマミトゲネズミ *Tokudaiia osimensis*

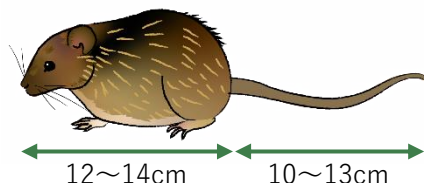
分類：齧歯目ネズミ科

分布：奄美大島

環境省レッドリスト絶滅危惧ⅠB類（EN）

森林に生息し、夜行性で、主に地上で行動します。シイ類のドングリのほか、アリなどの昆虫も食べる雑食性です。天敵のハブなどの危険が迫ると60cm近く跳ねて攻撃をかわし、身を守ります。

開発に伴う生息地の森林の破壊や、マングースやノネコの捕食により数が減少しています。



今後の計画

本園では、まずは「繁殖支援施設」として同事業に参画し、非繁殖個体（老齢個体等）を受け入れることで繁殖計画全体をバックアップします。この間に、飼育技術・知見の習得と向上を図るとともに、将来的に「繁殖施設」としての役割も担えるよう、環境づくりを進めていきます。

令和7年3月に、先行飼育動物園からメス3頭、オス2頭を導入し、飼育を開始しました。当面は非公開で飼育しますが、今後、公開展示が可能な施設改修を検討していきます。

	令和5年度 2023	令和6年度 2024	令和7年度 2025	令和8年度以降 2026～	前期	中期	後期
自国希少種の保全事業							
トゲネズミ類 生息域外保全事業		参画認可			繁殖施設 移行		
アマミトゲネズミ 飼育	飼育施設 視察	個体導入	飼育（非公開）		飼育・繁殖・展示		
認定動物園		申請	認定				

奄美大島の生態系を脅かすマングースとノネコ

マングースは、ハブやクマネズミの駆除を目的に、昭和54年頃に奄美大島に放されたと言われています。しかし、定着したマングースは、予想に反し、在来種のアマミノクロウサギやアマミトゲネズミなどを捕食しました。マングースは分布域を広げ、ピーク時には1万頭まで増えたと推定されています。

平成12年から環境省による駆除が本格的に始まり、様々な取組が行われた結果、令和6年にマングースの根絶が宣言されました。

しかし依然として、放し飼いや捨てられた猫が野生化した「ノネコ」による被害は解決しておらず、対策が続けられています。

新発見！哺乳類の新しい性決定の仕組み

ヒトを含む哺乳類は、性染色体がX X型だとメスに、X Y型だとオスになります。

しかし、アマミトゲネズミはY染色体を持たず、オス・メスともにX染色体が1本のみのX O / X O型という特殊なタイプであることが知られていました。

Y染色体に因らない性決定メカニズムは長年謎でしたが、令和4年に日本の研究グループがその仕組みを初めて解明しました。

アマミトゲネズミは生態系の重要な一員であるとともに、生命の不思議を私たちに教えてくれる貴重な存在です。



詳しくはこちら
北海道大学プレスリリース

(5) 登録博物館としての取組



「登録博物館」登録の目的

動物園には「種の保存」、「教育・環境教育」、「調査研究」、「レクリエーション」の4つの役割がありますが、これまで我が国の動物園は、レクリエーション施設としての側面のみが広く認知されてきました。一方で、動物園は、動物や動物に関する資料を収集・展示し、教育普及活動や調査研究活動を行う社会教育施設としても重要な役割を担っています。

そこで、博物館法における「登録博物館」の登録を受け、動物園の社会教育施設としての認知度の向上を図ります。

本園が実施している博物館事業



動物の展示



資料の収集・保管



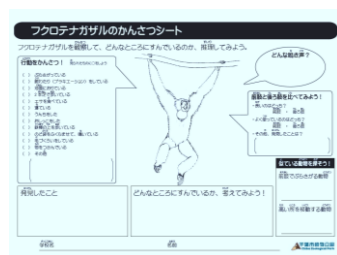
調査・研究



講演会・講習会等の開催、
教育活動



実習・研修



学校等への協力・援助

今後の計画

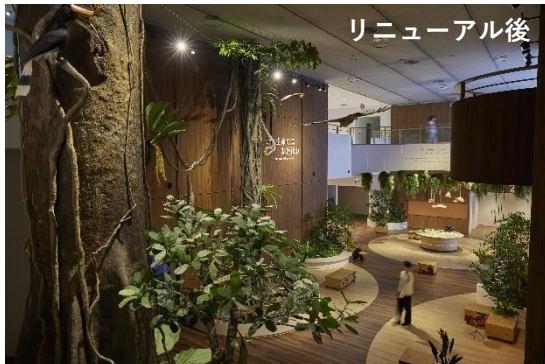
今後、本園は登録博物館として、収集・保管、展示・教育、調査・研究といった基本的機能の一層の充実はもとより、これからの博物館に求められる役割も意識しながら、各種の取組を実施していきます。

具体的には、社会教育施設としての運営を強化するために、「博物館職員」としての職員の意識改革及び養成を図ります。また、教育や文化の域に留まらず、まちづくり、観光、福祉、国際交流など様々な分野との連携することで、地域社会への貢献を図るとともに、動物園の博物館としての利活用についての研究を進めます。さらに、博物館の事業として改正博物館法に新たに規定された、博物館資料のデジタルアーカイブ化についても取り組んでいきます。

動物科学館のリニューアル

動物科学館は、開園以来40年ぶりの大改装を行い、熱帯雨林を体験しながら学べる施設「生命の森 熱帯雨林」として令和7年3月にリニューアルオープンしました。

エントランスホール



シンボルツリーの「フタバガキ」がそびえ、その周りを動植物の模型が取り囲みます。



林床の世界



土壌生物になったような視点で、土壌分解の様子を天井投影映像で体験できます。

地球環境と熱帯雨林



熱帯雨林の破壊が地球環境に及ぼす影響を、炭素と水の循環を通して解説しています。

（６）年間入園者数１００万人達成と安定した経営へのロードマップ

引き続き、魅力ある施設整備、生物多様性の保全、社会教育施設としての機能の充実、趣向を凝らしたソフト施策を実施し、リスタート構想の最終目標である年間入園者数１００万人を目指していきます。

安定した経営に向けた目標とする指標と取組

	令和１７年度目標	備 考（令和６年度実績など）
有料入園者割合	他の主要動物園の状況も踏まえ ６５％程度を目指します。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 令和６年度：４８％ 平成27年度：52％（小中学生無料化前） 平成28年度：44％（小中学生無料化） ・ 他園の実績（令和４年度） 旭山動物園75％、上野動物園72％、 大阪市天王寺動物園67％、静岡市日本平動物園66％、 豊橋総合動植物公園64％
経常収入/経常経費※	１００％以上（「経常収入」が 「経常経費」以上になること） を目指します。	令和６年度：４１％

※ 経常収入 ： 入園料・駐車場使用料・許可使用料・設備貸付料・命名権収入
 経常経費 ： 人件費・運営費・施設管理費・動物関連費

- ・ 魅力ある新ゾーンの段階的整備と、効果的な集客プロモーションを実行することで来園者数の増加を図ります。
- ・ 新ゾーンのオープンに合わせるなど適切なタイミングで料金改定を行うとともに、社会情勢や経済状況を勘案し、料金体系を見直すことで、来園者一人当たりの料金単価の引上げを図ります。
- ・ 効率的で適切な経費運営と、経費の縮減に取り組むとともに、新たな学びや楽しみ方の創出と価値化、ネーミングライツ、協賛金等による収入拡大を図り、経常収入が経常経費以上になることを目指します。
- ・ 本指標の達成度を毎年度検証し、必要に応じ計画の見直しや修正を検討します。

取組の全体スケジュール

	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度以降	前期	中期	後期
	2023	2024	2025	2026～			
湿原ゾーン	基本計画	基本設計	実施設計	工事	●先行オープン ●全面オープン		
森林ゾーン							
第1期 アフリカの森				基本設計	実施設計	工事	●オープン
第2期 アジアの森					基本設計	実施設計	工事 ●オープン
第3期 科学館動物展示場						基本設計	実施設計 工事 ●オープン
平原ゾーン 未整備部分						基本設計	実施設計 工事 ●オープン
大池ゾーン							
整備		基本設計	実施設計	工事	●オープン		
生物調査・保全活動	生物調査・再整備計画	定点観測・保全活動・ボランティア育成					
景観計画		ランドスケープ計画					
自国希少種の保全事業							
トゲネズミ類 生息域外保全事業		参画認可			繁殖施設移行		
アマミトゲネズミ 飼育	飼育施設視察	個体導入	飼育（非公開）			飼育・繁殖・展示	
認定動物園		申請	認定				

リスタート構想 施策体系図

